

Requiem in 石巻

その、無残な有様に言葉を失った。

目の前の光景が、もしも神の仕業なら、俺は神を憎む。

車は静まり返った町の通りを抜けて、住宅地を巡らす細い急坂を上り詰める。
津波の被災地・石巻一帯を見渡す「日和山公園」では、折しも強い風と雨と
で、俺の安物の折り畳み傘は全くの役立たずだった。

眼前に広がる荒れ果てた姿に、思わず息を飲んだ。



車は、坂をゆっくりと下っていく。

さっき見下ろした光景が、眼前に広がる。

雨脚は一段とその激しさを増し、津波の犠牲となった幾多の死者の魂が、大声を上げて泣き叫んでいるかのようなようだった。

辛うじて原型を留めているお寺があった。隣接する墓地の前で車を止めてもらう。

車窓から臨んだものは、倒れたままの姿で雨に打たれる夥しい数の墓石。残酷極まりない風景だった。



病院も学校も廃墟と化した。

怒りの気持ちも枯れ果ててしまうような仕打ちの前には、どんな慰めの言葉も空虚に響くだけである。

人間界の、巨万の富も煌びやかな名声も、自然界の壮大なパワーの中にあっては何と虚しいものだろう。



ワイパーの作動と降りしきる雨の音。
俺は、自然と熱くなる目頭を押さえて、そして祈った。
カーステレオから流れるサザンのエイトビートが、鎮魂の調べを奏でている
ようだった。

